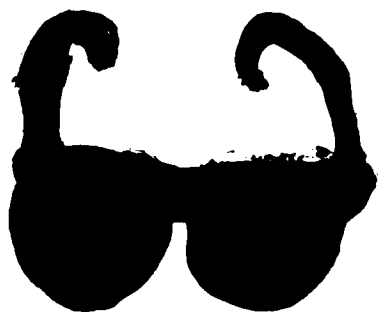


風来めがね

野坂昭如



文藝春秋

風来めがね

昭和四十五年十月二十五日 第一刷

著者 野坂昭如

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

郵便番号一〇二

電話東京(03)二六五局一二二一

振替東京七八七四三

凸版印刷 大口製本

定価五〇〇円

© 1970 Akiyuki Nozaka

万一落丁・乱丁の場合は
お取替えいたします。

Printed in Japan

目次

いのちからがら 唐くだり	五
海は広いな、鼻毛もつきた	三
闇市復活祭	四
歌って碎けろ	六
里のやつれ 雪のやつれ	九
吉凶歌占い	七
逃走への蜂起	二三
垢臭之男命たち	一九
わが内なるマゾ	一五
赤線 疥癬 お賽銭	一三
講演芸人廃業の弁	一八
我等なぐられ派	一九

装帧
田島
征三

風来めがね

いのちからがら 唐くだり

旅の楽しみの一つに、とそれほど大袈裟なことでもないが、ぼくは列車に乗りこむ前、ふだんあまり読む機会のない実話丸秘好色雑誌を買いこみ、快い震動に身をまかせつつおもむろにひもとくことが、あげられる。このての雑誌と、乙にすましたそののいちばん大きなちがいは、ヌード写真に差のあることで、その他の内容にそう隔たりあるとも思えず、ぼくは海外雑誌における植草甚一氏の如き、実話丸秘好色の權威たらんと志し、だから旅行のつど求めるのだが、このたび五月下旬、ふらりと道祖神のまねきに応じ、とはまたキザないかたで、実はわれもまた流行作家のはしくれに連なつたらしく、月平均六百枚を書けば、いい加減タネもつきる、特に東京という本妻と狎れしたしみ過ぎて、いっこう刺戟を受けず、神戸焼跡大阪關市いわば情婦との間に、もはや感興はうすれた、これは何とかしなければ、この生業はじめてまだ三年というのに、産み出すものは鬼っ子ならまだしも、死産流産早産ばかり、止むにやまれず家を出たので、とい

って、いわゆる取材ではない、ただ水が変れば腹もこわすだろうけど、ひょっとしたら思いがけぬ珠のような子供も、はらめるのではないかと、雲の流れに身を占って行方定めぬ旅衣は、パリのレインコート一枚、浮浪児上りの気楽さに、磨かず洗わずとりかえず、思い立ったがすなわち吉日鹿島だち。

とにかく夜七時の新幹線にのり、かかえこんだ雑誌六種、まずはじめの一冊は「とび出すヌード、カーセックス態位解説」が売物で、たちまち心ときめき、便所へ入る。ぼくは、わりに照れ屋で、雑誌に付属の、右が赤で左は紺の眼鏡を、わがサングラスに重ね、人前では楽しみにくい。便器にしゃがみ、とっくりながめれば、麗々しく「前側位」「背面位」と名づけられ、場所がせまいからいずれも胎児の如く体まるめた美女の姿、その脚や手になるほど立体的に浮き出してみえる、別にどうってことはないが、やはり物狂おしくなるもので、ふと、この便所の鍵は、掛け金式だから、溝にチューインガムを埋めておけば、閉めたつもりでも鍵がかからぬ。その仕掛けをして、前の洗面所で待ち受け、若き女性の入ってほどよき頃、「オヤ、失礼」と、のぞいてみようかなど、ふと考える。次ぎなるは、ヤングレディー百人ヌード行進が売物で、これはまあ椅子にいても大丈夫、写真よりキャプションがおもしろく「シルクハットを小粋にかぶり、虹よりでっかいオッパイ張って、ビストルなんぞ怖くはないぞ」やら「幸せだったあの頃は、遠い昔の夢なのよ、ベットの人形持ちこんで、だけどベッドはまだ広い」何百枚もある裸女の姿一つずつ

に七五調というか、活弁サーカス呼びこみのぞきからくり式文章があり、どういう才能が書いているのであろうか、そういえば、雑誌だから必ず小説もあり、よく野坂という名の、二流ギャングが登場し、最後はピストルで腹を撃たれ、はみ出た臓物悲し気にながめ、大小便たれ流しつつ殺されたり、「黒眼鏡のブレイボーイ」「自称心情三派の似非文士」というような言葉がでてくる、ここを舞台とする作家にとっては、きっと小生などまことに小癪な存在なのだろう、ぼくも雑文を書いている時、知らん顔して、お偉方の癖を観察し、かなり悪意に満ちた解説を加えたりしたものだ。

こういった雑誌の、あるいはいちばんの読物かもしれないのが、広告であって、「見たぞ、見えたぞ透視メガネ、服を着た人みてごらん、何が見えるかマックロケのケ」などある、子供時分にも同じようなうたい文句、太陽に指をかざし、五センチほどの望遠鏡の形をした道具でのぞくと、たしかに骨がすけてみえた、あまりの不思議にぶっこわして調べたら、接眼面の硝子に、水鳥の羽毛の如きものが貼りついているだけ、実にかっかりしたのだが、この広告文ではマックロケのケがうまい、何も見えなくても、嘘じゃない、江戸両国見世物の精神であろうか。

ビュッフェへ出かけ、ウイスキー飲んでいると、隣席の朝鮮人から話しかけられる、いろいろたずねられるが、何をいっても他人の意見のうけ売りみたいな気がして、生返事しかできない、その向うに評論家の〇氏がいて加わり、明快に諸問題を裁断していく。きけば中国地方の、バリ

ケードで封鎖された大学へ出かけるとのこと、バリケード内に警官と衝突して、重傷を負った学生がいる、逮捕状が出ているため、病院へ運びこめず、悪化するばかりという、どうすりゃいいの思案橋だ、かつて河合栄治郎は、花も嵐も踏みこえてとことあるごとに低く唄ったそう。ぼくはとても駄目であって、さんざひやかされた心情三派も、つまるところどうすりゃいいの、思案橋に過ぎぬ。あの戦争にいたるまでの日月、当時の知識人文化人は何をしてたのかと、一年前まで本気に怒っていた、ところが今では、それより更に卑怯未練なわが心ざまを確かめ、とても花も嵐もどころではない。ビュッフエにある速度計は二百十キロをしめている、飛行機から人間が落ちたとして、地面にぶつかるときのスピードは二百五十キロ、空気の抵抗があるから、これ以上にはならないそう、今まさに水平に落下しているわけで、脱線でもすりゃ全員即死であろう、せめて自分一人だけ生き残れないかと、その際の体の向きにつき、あれこれ考えてみる、車両のいちばん後にいた方が、慣性によって前に吹きとぶであろう乗客の、その体をクッションにできるから少しはましであるまいか、ぼくだけ生き残ったら嘘八百の手記を書く、「その時、死んだ妹がひょいとぼくの前にあらわれて、無言のまま後へ席を移るようしめました」ああ、旅行けば物狂おしい。

夜十一時発第二月光に乗りかえる、月に一度二週間ほど放浪、目的を持たない旅をするつもりで、これが第一回目、切符宿の予約もしない。旅といって別に遠くへいくだけでなく、ただ家を

はなれたのである。幸福というより、家路たどることこそ諸悪の根源ではないか、人間は何故家へかえるのだろうか、あれほど酔っていながら定刻になると、しごく憂うつそうに、しかも尚断乎として、なぜ帰途につくのか、自分でかえりみて不思議に思える。べつだん放蕩無頼流連荒亡にあこがれるのではないが、とにかくバート家出だ、わが血をあたらしくするにはこれしかない。しかし、目的を持たない旅も、むつかしいもので、やれ四国でお遍路やってみるとか、ミシンのセールスマンを経験しよう、宿は商人宿で、安酒汲みつつ、仲買人と仲良くなるうなど、いやしい下心がちらつくかと思えば、やはり曾遊の地、旧知たずねる心がうごき、なにやら心もとない。第二月光に寝台がとれなければ三宮で降りるつもりだったが、運よくありつけて横になる、カーテンから首を出し通路をうかがう、すでに寝静まっていて、見ず知らずの他人が三段ベッド重なりあって白河夜船など、なにやら異様な感じ、お互い信じあっているのだな、ちいさな螢光燈の光で、犯罪実話を読む、怖くなる、＼人は誰もただひとり旅に出てという唄の替唄を考える。この家出について、特に計画はないのだけれど、俳句と和歌をつくってみようと思ひ、ひそかに思い、あのようにきっかり七五調で、心情を整理してしまうのは、しかもぼくがやれば、きわめて月並みになるであろう、べつだん取柄はないが、逆に旅情をきわめて月並みに、俳句和歌風に感じてみたい気持がある、九州は筑豊の荒廃をながめ、かつて石炭産業の栄光を思いつつ、現在、そこに残った人達の大半が生活保護法の適用をうけ、あたり一帯、精神病院と、金融業者と、人

買いののさばるありさまに、のめりこみ心うたれるよりも、鉾害池埋め立てのため、今はボタ山すらも切りくずされて、まさに何もなくなってしまうた風景を、三十一文字にまとめてみたい、所詮、小生如き者の、荒廢に関わり合えるとするれば、その程度ではないのか。

朝七時五十分、博多駅に着く、小雨が降っていて、駅前に人影はない、第二月光号は、終点まで寝台を片づけないから、よく寝られて便利、六時前にたたき起され、それなりの事情はあるのだろうが、ドシンボタンとベッドを椅子に直す作業、見守っているのは苦痛なものだ。食堂でウィスキー飲みつつ、この地で手広く洋服屋営む郡島敬に電話をかける、郡島とは神戸中学での同級生、焼けたために、中学時代の知人は、彼一人しかない、多くの小説を読み、どう考えてもこれを書いた男は、自分と同級にちがいないと考え、郡島が電話してきて、再会にいったものの、私小説風小説も、それなりに役に立つ。

郡島と、もう一人上田なる生徒が、中学で名うての軟派だった。戦時中の軟派は命がけで、特に神戸中学は鉄の規律を誇っていたのだが、くじけずゲートル捲いた上の部分を三角にとがらせ、規定より幅広いカラーをつけ、ところが戦争に敗けると、この二人は、かつての級長など優等生が、しごく墮落したのに、べつだんかわらず、二人とも喧嘩が強かったから、弱い者の庇護者となつて、うわべだけみていると、えらく立派に更生したようだが、実は彼等こそ不動の立場にいたので、時代の方が移りかわって、二人をきわ立たせたのである。郡島の店は、戦前の元町高級

舶来生地屋の構えを、そっくり生かして、ここにいと、三十年歳月消しとび、父に連れられ元町を歩いていったような気になる。

午前十時頃から、店で郡島と飲む、ダンブ作家揚野浩が来る。ダンブは形容詞でなく、彼はハトングンブカーに寝泊りし、鉄材を運びつつ小説を書いている、酒ばかり飲み栄養をとらないから鳥目になったらしい、鳥目のダンブとはまた怖ろしいが、また、なつかしくもある、そういうえば美貌の少女詩人金井美恵子氏も、栄養失調で、椅子から急に立ち上るとめまいがするといった、健康優良児ばかりの中で貴重な存在であろう。去年の暮揚野が東京へやってきて、四日間我が家に泊った、一日目は「服など着んでもよかたい」と汚ないパンツ一枚でのし歩き、軟弱な東京勢を驚倒せしめたが、四日目の朝には、「お早うございます」すでに標準語風にあいさつし、きちんと服を着て、わが娘をあやしなどし、実にあざやかな転身ぶりで、それだけしたたかさを感じたものだ。

ひたすら酒を飲み続け、夕刻、九大図書館に勤める岩井護氏をさそい出す、「雪の日のおりん」の作者、郡島の案内で水炊きを食べる、岩井氏は長年の図書館勤めの経験から、調べたい資料を探す時、本の臭いでわかるようになったという、郡島も、洋服の生地臭いについて語る。嗅覚はもっとも原始的な感覚で、目の見えない嬰兒もこれだけはたらくのだそうだが、ぼくの嗅覚は何にむかって、もっとも鋭く働くのか、焼跡人糞の臭いのみなつかしがつているのは情けない。

岩井氏は、戦時中動員で田川の炭鉱に働いていた、オーストラリア兵捕虜と、強制徴用で日本へ連れてこられた朝鮮人労働者の、悲惨な状態を、とつとつとしゃべる、たしかに誠実な話し方というものはあるもので、たとえば直方六反田に住み、あくまで筑豊の最後みとどける上野英信氏、ぼくなどがついタクシー拾おうとすると、「歩きましょう、ねっ、歩いていきましょう」特有の口調で、決して押しつけがましいのではなく、しかもこちらにうまいわせず、TV的発声とまきにうらはらなもので、この筑豊文庫の孤塁守る上野氏にくらべると、ちゃんなバリケード築いて解放区などちゃんちゃらおかしくなる、といっても、ぼくはさらに何もしてないのだが。

朝の早い岩井氏は帰宅し、二人ゴーゴークラブへ向かう、「敗けた後、沢山日本の娘G.I.にやられましたからな、少しはおかせしせん」という大義名分により、これよりそのクラブに蜷集するという、アメリカ基他家族ハイティーン娘をひっかけるつもり、郡島は英語中国語朝鮮語に堪能だが、こっちは母国語がようやとで、ましてハイティーン娘となれば、拳闘でいうと二階級上と立ち向かう心境。さらに酒を飲み、クラブのくらがりやすみ出る、七、八人紅毛の醜女が踊っている。すぐ加わって、なぐりこみ風ゴーゴーに狂う。唄と同じくダンスも世につれるように、マンボは泰平ムードのきっかけに応わしく、ドドンパトウイストそれぞれ、その泰平の御世のズレをあらわしていたようだし、ゴーゴーは平和に疲れたしるしの如く思える。そばかすちんちくりん胸ばかりでかい紅毛少女で、何かしきりにさけぶも、場内圧する騒音にまぎれてきき

とれぬ、壁ぎわにもどって、俱に酒をのみ、片言でしゃべりかけ、肩を抱き調子いいはずが、何
 が気に入らなかったか、不意に立ち上って仲間と早口にいいかわし、じろりとみすえる眼に侮べ
 つの色があつて、ぼくは外人にこれをやられると、向つばら立てるより、卑屈に笑つてしまふ、
 多分、中国では漢奸ヨーロッパにあつては対ナチ協力者のクチであろう、郡島は逆におこつてい
 る、「図々しい女やねえ、日本人なめてけつかる」結局はこれも喧嘩別れで、とても終戦直後焼
 跡に散つた処女の霊なぐさめるにはいたらぬ、また中央で踊り出した紅毛醜女をながめ、大和男
 子は氣おくれするのか、誰も相手を買つてでない、傍若無人に彼女たちは踊り、ぼくはかいま見
 える白いバンティをのみ楽しむ。結局、銀座風クラブ「A」「M」「H」を、はしごして、ぼくは
 やたら卑猥に酔いつぶれ、危くストリップしかける、近頃、この癖がつき、酒飲みというものは、
 妙なきっかけで、特有の癖がつくと、いかに素面の時自戒しても、必ずくりかえし、このたびは
 ホステスの一人の献身的タックルにより防がれた、それが結びの縁となつて、郡島も相手一人と
 もない表へ出る、戦前から国粹団体が経営するというギョーザ屋で、大陸仕込みのギョーザを食
 べ、焼酎を飲む。

ホテル「N」へ四人もつれこみ、郡島は自宅へもどる、まごう方なき温泉マークで、三人所在
 なく布団のそばにすわりこみ、壁にはめこまれた鏡にそれぞれの姿が写っている、背の高いやや
 九重佑三子風女性、田川の出身、低くて和服森光子風は宇部の産、いずれもかつて石炭で栄え

た町だが、その没落と、今のなりわい直接関係はないらしい。話のつきほを失い、冷蔵庫のビールを飲む、光子風が甲斐甲斐しく世話をし、風呂の具合を佑三子風がみる、「お入りにならん」と？ときそわれたが、こう飲んでいては心臓麻痺が怖ろしい。女二人、脱衣場へ消え、ぼくは布団に横たわる、横向くとわが寝釈迦風姿が否応なく眼に入り、温泉マークで一人鏡にうつるわが姿ながめ入るのは、一種自省のチャンスである、これがまあ三十八歳の面かと思ひ、細い腕にボディビルを考え、三島由紀夫氏は心情三派を不潔といていたな、汗ばんだ体からどろっと体臭がこぼれ出し、枕もとの抜毛一本みつめ、陰毛はなぜちぢれているのか、湯殿は妙にひっそりしている、ガス中毒で死なれでもしたらえらいことだ、女性週刊誌に出るだろう、あれはまったく現代の補導協会プラス愛国婦人会である、など考えるうち寝こんだらしく、気がつくと朝で女二人の姿はない。

温泉マークの朝のトーストなんてものは、決してすがすがしいものではなく、後の祭の欲情などふと覚え、手淫でもしたらるか、考えているところへ、郡島があらわれ、「ではそろそろいきましょか、あなたがいうから車はおいできましたよ」しごくさっぱりした顔でいう、家庭という奴は、すくなくとも男を小綺麗にはする。ぼくは酔って、しきりに島原半島へいくと主張し、郡島に同行をせがみ、しかも彼が車でドライブというのを、一喝して断乎電車とバスでなければ旅とはいえぬといひ張り、小生いささか教条主義に毒されているらしい。